

出張型陶芸クラブの効果に関する探索的研究

鈴木達也 *¹⁾, 建木健 ¹⁾, 佐野美幸 ²⁾, 藤田梢 ²⁾

縣知子 ³⁾, 佐野佑未子 ⁴⁾, 太田加枝菜 ⁵⁾

¹⁾聖隷クリストファー大学, ²⁾白梅ケアホーム

³⁾憩いの家だーま, ⁴⁾ワークセンター大きな木, ⁵⁾はるのケアセンター

I. はじめに

本研究は 2011 年度の地域貢献事業である「出張陶芸クラブの創設」の継続研究事業として行った。昨年は大学の作業療法学科の設備である陶芸窯を活用し、教員や学生ボランティアが必要な用具を持って施設に赴いた。そこで参加者に作りたいものを作って頂き、作成品を大学の窯を利用して焼き上げ完成品を参加者に届けた。2011 年度は 7 施設で計 20 回、のべ約 260 人を超える参加者に対して陶芸を行った。参加者は初めて陶芸を行ったもので陶芸という作業に個別の意味を見出し、積極的に行う参加者が多くみられた。

今回は昨年度と同様の方法で行う出張陶芸クラブに加え、施設職員や参加者に対してアンケートを行い、出張型陶芸クラブによる効果を探索的に明らかにするものである。

II. 目的

本研究の目的は施設に赴いて実施する出張陶芸クラブが参加者にどのような効果をもたらすのかを施設職員の視点から明らかにするものである。これにより出張陶芸クラブの効果だけではなく、ボランティアを含めた施設外部者による施設利用者への支援方法の効果・意義、他の手工芸や趣味活動の新たな取り組み方、講義形式や施設職員向けの出張講座とは異なる大学の地域貢献事業に示唆を与えると考える。

III. 方法

浜松市内の通所または入居施設を対象に研究協力者が該当施設の利用者に説明し参加希望者を募り白梅ケアホーム、憩いの家だーま、はるのケアセンター、ワークセンター大きな木、山の手倶楽部で行った。実施に当たっては研究代表者、研究分担者、研究協力者に加え施設職員や、学生ボランティアの協力を得て行った。実施に際しては素焼きと本屋機の過程があるため「成形」と「色付け」の二度の工程に分け、2 週間から 1 カ月の期間を空けて複数回行った。

アンケートは陶芸活動終了後に実施した。アンケートの項目は「1. 活動についてとても良い～とても良くないまでの 5 段階の回答」と、「2. 1 の回答の理由」、「3. 参加者の発言や感想など印象に残っていること」、「4. 参加者の様子で普段と異なるところ」、「5. 学生が参加することについて 5 段階の選択式回答」、「6. 出張陶芸の継続について」、「7. その他気づいたこと」の 7 項目について回答を得た。アンケートは倫理面に配慮し無記名で行い返信をもって研究参加に同意が得られたものとした。

IV. 結果

陶芸の実施期間は平成 24 年 9 月～平成 25 年 3 月。実施回数は 20 回、延べ 250 人の参加者と述べ 22 名の学生ボランティアに協力を得て実施した。アンケートは陶芸活動終了後に研究協力者に配布し、2 施設の職員計 30 名から回答を得た。アンケート結果についてはアンケートの項目別にその回答を抜粋して報告する

1. 活動について（5 段階の選択式解答）

とても良いが 93.3%（28 名）、良かったが 2 名（6.7%）といずれの施設でも「良い」との解答が全体を占めていた。

2. 1の理由について（自由記述式）

- ・自分で作品を作る機会がないのでいい経験，記念になったと思った
- ・陶芸は日常では味わえないのでよい刺激になったと思う
- ・普段行うことのない陶芸をやることで，利用者様の生き生きした姿を見れた
- ・学生との交流を計りながら楽しく取り組まれていた
- ・色はどうしよう，形はどうしようと色々考えながら取り組まれていた
- ・誰に，何を作るか利用者様自身が振り返りの場になり，作る喜び，使用する喜び，贈る喜びを得られたと思う

など，合計 29 の回答を得た．陶芸が施設では非日常的な活動であること，学生との交流が生まれたこと，作成中に楽しそうに積極的に取り組む参加者の様子が理由に挙げられていた．

3. 参加者の発言や感想など印象に残っていること（自由記述式）

- ・「孫のプレゼント」，「ご飯の時に使う」など楽しそうに話されていたこと
- ・「米寿の記念になるように」とデザインについて一生懸命考えて発言していた
- ・「上手くは出来なかったけど，愛着が湧いたわ」と自室に飾る花瓶を作った利用者が発言されていたこと
- ・夫婦で参加されている利用者様が「おそろいの物が出来てうれしい」と話されていた
- ・みなさん「楽しかった」と言っていた



など合計 24 の回答を得た．陶芸活動中，または作品が完成した後の参加者の発言や作品の個々の使用目的などのエピソードが多く職員の印象に残っていた．

4. 参加者の様子で普段と異なるところ（自由記述式）

- ・普段活動をしない人でも目が輝いていた
- ・真剣に取り組まれて集中していた
- ・帰宅願望の強い人が，実は絵を描いたり作品作りが上手であることを知れた
- ・次回を楽しみにしていたところ
- ・利用者同士で相談しているところが見られた
- ・学生と笑顔で話しているところが印象的だった

など合計 26 の回答を得た．普段よりも真剣に取り組んでいる様子や，落ち着きのない人が集中して取り組んでいるなど，施設内での日常の姿とは違った面が見れたことが多く語られていた．



5. 学生の参加について（5段階の選択式解答）

とても良いが 90.0%（27名），良かったが 3名（10.0%）と良いと答えた者が多かった

6. 出張陶芸の継続について

- ・回答者 30 名全員が今後も継続してほしいと解答した

7. その他（自由記述式）

- ・作品を地域の文化展に出店した．いまでもサービスステーションに飾っています
- ・完成後それぞれのポーズで写真に写っておりとても満足げだった
- ・施設には陶芸の施設，設備がないのでまた来てほしい
- ・毎年継続してほしい，他の曜日にも来てほしい

- ・沢山の学生に来て下さりととても助かった．もっとより大勢の学生に来てほしい
- ・作品のサンプルがもっとあると作りやすいと思います
- ・利用者と学生がふれあえる機会ができて良かった
- ・初めての人でも学生が丁寧に接してくれるので安心して任せることが出来た

VI. 考察

今回のアンケートの結果より，出張陶芸，学生ボランティアの参加，活動の継続についてはほぼ全員が前向きな解答をしていた．その理由としては，作業活動としての陶芸の特性，参加者の変化，出張陶芸の実施方法の3つに分類できると考えられる．



1. 作業活動としての陶芸の特性

今回の陶芸は粘土から成型し素焼きを行い，各自の自由に絵柄を決めて頂くように行った．一般に成型や色付けなどは自由度が高いと難易度が高く実施時には困難が生じやすい．しかし，今回は見本を見たり，どのような形にするのかを紙に書いたり，研究者や学生ボランティア，施設職員と共同で行うことですべての参加者が自分自身の作品を完成することが出来た．それにより障害や認知面に問題があってもすべての参加者が作品を完成させることが出来，作業中の集中や積極性，満足感や達成感を得ることができ，職員の前向きな回答につながったと考える．

2. 参加者の変化

アンケート結果より参加者のいつもとは違う表情や様子が見られたという解答が多かった．普段は帰宅願望が強かったり，活動に参加しない人が真剣に，また楽しんで陶芸を行っていた．これは陶芸の作業活動としての作業の特性に加え，自分自身で作品を作るということや，どのような作品を作るか，また作った物をどのように使うのか，誰のために作るのかと言った，作業に対する意味を見いだしやすいということが考えられる．参加者の中には米寿の記念，孫へのプレゼント，亡き夫への仏壇に飾る，などその人その人固有の参加する意味が生まれていた．その目的意識の違いが普段とは違った様子を見せることにつながったと考えられる．

3. 出張陶芸の実施方法

今回の陶芸活動は施設内で行われる日常的な活動ではなく，普段行っていない非日常的活動であったこと，陶芸は道具や設備が必要で施設内では行いにくい活動であること，出張という形態で外部から人が来るということ，そして学生ボランティアや職員も一緒に参加することで，参加者と学生との交流が生まれ，一緒に考えながら，協同作業で行えたことが前向きな回答に結び付いたと考えられる．

VII. まとめ

以上のアンケート結果から出張陶芸の効果について参加者に個々に良い効果を生み出す可能性が示された．高齢者施設には不定期的にボランティアや慰問活動など外部者が活動を提供している．陶芸の様に個人的な意味を生み出しやすい活動や職員，ボランティアスタッフと協同することにより参加者に良い影響をもたらすことが示唆された．今後は出張陶芸の継続方法や実施時方法の改良，参加者個々人の影響について検討していく．

VIII. 謝辞

お忙しい中，出張陶芸への参加とアンケートにご協力いただいた施設職員の皆様にお礼申し上げます．